

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號三第 卷五十第

行發日一月九年一十正大

論叢

マルクス氏の集産主義の實行難を論ず
 交通税の本質 法學博士 田島 錦治
 階級に就いて 法學博士 神戶 正雄
 基督教文明の發展概論 文學博士 高田 保馬
 社會哲學に於る主意的二元論的思想 法學士 財部 靜治
 恒藤 恭

時論

財産税論 法學博士 小川郷太郎

資料

小作爭議原因の研究 法學博士 戸田 海市

雜錄

フーガスの本能的社會觀 法學博士 河上 肇
 我國の離婚率に就て 經濟學士 岡崎 文規
 定價制と正價制 法學博士 河田 嗣郎

階級に就いて (二)

高 田 保 馬

一、全體社會的範疇としての階級

二、階級は國家的範疇なりと云ふ事の否定

三、階級と社會的勢力

四、能動的及び受動的なる社會的勢力(廣義の權力及び威力)

五、機能的分配及び非機能的分配

六、國家以外の部分社會に於ける機能的、非機能的分配

七、職業的分配、非職業的分配

八、聯絡の傾向

九、權力、富力、地位の相互關係

十、國家の權力と他の社會の權力との關係

十一、平行の法則及び集積の法則

十二、吸收の法則及び均衡の法則

十三、結 論

本號所載

次號以下掲載

—

階級の本質如何は極めて困難なる問題である。私は今此難問の解決を試みようとするのでは無

い。たゞ階級と國家との交渉の一方面を明にしたいと思ふに止まる。かゝる方面の考察にありても、既に階級の内容が決定せらるる事を豫想するが、それは容易の事でないとするれば、階級の何たるかを常識の解釋に委して此議論を進める外は無い。

私が此小篇に於て明にせむとする所は階級に於ける國家外的要素の存在である。換言すれば階級が國家的範疇 (state-category) と稱した(二) に非ずして全體社會的範疇 (community-category) であると云ふ事である。かゝる造語の當否は別問題として、私が此命題によりて意味せしむる事は、或は一般人の常識的直覺に於て極めて明瞭であるかも知れぬ。併しながら、一方に於ては、それが從來學者の間に意識的なる問題として取扱はれず、動もすれば而してまた屢、階級が國家的範疇として認められる、私自身も嘗てはかゝる考を漠然ながらに抱いてゐた。而して他方に於て、階級が全體社會的範疇なる事を明にするは、それが階級に關する諸種の問題の理論的考察に必要な點を姑く措くとしても、社會學組織に於ける階級論の地位を定むるに極めて大切な事である。たゞ此點に關しては今立入りて説明を加ふる事の、餘りに餘談に亘るのを遺憾とする。兎に角に、以上二の理由よりして、或は常識的に自明の事とも見ゆる内容に理論的なる表明と論證とを興へたいと思ふ。

茲に階級が國家的範疇なりと云ふは、階級が國家組織の一部分をなし、従ひて國家組織により

て階級の組み立てが決定せられ、前者に於ける變動が後者に於ける變動のすべてを意味すると云ふのに外ならぬ。結局國家と云ふものゝ一方面として階級が存在し、階級の一切の變化が國家の一切の變化と終始すと見るのである。例を援いて更に説く。耳鼻口腹は有機體的範疇であること云ひ得る、前者は後者の一部分をなし、前者の變動はたゞ後者の變動に伴ひてのみ生起する。此の如く身體器官が有機體的の一方面として有機體的範疇なるが如く、階級が國家の一方面として國家的範疇であると考へられる。これと反對なる見解は階級を以て全體社會的範疇なりと見る。詳言すれば階級が國家の一部分をなし其組み立てが國家の組織のみにより決定せられず、寧ろそれは全體社會の一方面又は一部分にして、其變動は全體社會の變動を表明するものと考へる。全體社會を離れこれを豫想せずしては階級の概念の成立し得べからずと見るが故に階級が全體社會的範疇となる。茲に全體社會と云ふのは一定の範圍を限りて見たる一團の人々の間に錯綜する結合的關係の總體を意味するに外ならぬ。従ひて國家は勞動組合、政黨、宗教團體、株式會社の如き他の團體、交易、友誼、契約の如き諸關係と共に、此全體社會の一構成分子をなすに止まる事、嘗て反覆したる所である。英米に於ける一團の學者(マクイバア、コオル、ラスキ等)の所謂 community は殆どこれと内容を同じくする。

從來の學者にして、此問題に關する意識的答解を試み、而して階級を以て國家的範疇なりと説

きたるものは稀であると思ふ。然れども、國家を全體社會と同一視するが故に、階級の國家的範疇に非ざる事を意識せず、而してその全體社會的範疇なる事を明確にせざる學者は甚だ多く、之を全體社會的範疇なりとして積極的なる論述を試みたるものに至りては寡聞未だ之を耳にしない私の今の立場は階級を國家的範疇なりとなす論者の論據を吟味する事に存せず、蓋しかゝる論據は之を發見する事を得ざるが故である。左に、國家全體社會の同視により、漠然に而して素朴的に、階級を國家的範疇なりと見る見解の何故に取るべからざるかを明にし、又何故に之を全體社會的範疇と見るべきかを論證せむと思ふ。これは全體社會の概念の明瞭なる意識が階級の考察に與へ得るものゝ清算に外ならぬ、而して從來混同の中に不明瞭なりしものを明確に分明ならしめむとする試みに外ならぬ。

二

階級が國家的範疇に非ざる事を明にするには階級に於ける國家外的要素の存在を確認するより近道は無い。勿論國家が階級の上に決定的作用を及ぼす事は明白なる事實である、即ち國家の意志（かゝる社會の意志と云ふものが何物を意味し得るか別の場合に於て述べた）又は國家の組織によりて階級的區劃が種々に決定せられたる變動する。然れども階級には此國家による決定を

またざる方面が明に存在し、而して此方面が階級組織に於て極めて重要な意義を有する。かゝる方面、即ち國家外的要素の何故に認められざるべからざるかを説明したいと思ふ。

先づ時間的發達の道行から見ると。國家が一の歴史的範疇として、社會の發達の或る段階に成立したる事は云ふまでも無い。然るに階級は此國家の形成を俟たずして既に存在する。國家の概念が種々なるものであり得るに拘はらず、これをその極めて寛き、從つて内容の乏しき意義にとるも亦然り。この事は人々の本性即ち其要求の分析より云はゞ演繹的にも論結し得られると思ふけれども、かゝる論證の道行にまで便る必要は無い。グムプロヴィツチ、ラツツエンホオフア、オツペンハイマア(或る意味に於てはツェンカア、スモオル、ヲオドなど)の如く、國家と階級と分業との起源をすべて征服にもとめ、三者の成立を以て同一過程のそれぞれなる方面と見る考は支持し難い。國家の成立が極めて屢、かゝる外部的融合の過程即ち相異なる社會の接觸合一に負ふ事は争ひ難きにせよ、國家以前の社會の内部よりの發達によりて、云はゞ自生的に國家の形成せらるゝ事は數多の學者の認めたる所である。而して、かゝる學者の考に従へば、階級は其種々なる形に於て、國家の形成以前に存在する。例へば。奴隸は必ずしも國家の形成をまちて存在するのでは無い、既に牧畜乃至は幼稚なる農耕の行はるゝ所、それは國家を俟たずして存在して居る又國家の形成せらるゝに至らざる時、既に戰時に於ける指揮者たる武將、平時に於ける行政上の

指導者なる代表者乃至首長などが認められる。宗教的なる仕事を以て專業となす僧侶或は魔術師の夙に存在する事は説くまでも無い。更にまた、或種の私有財産の認めらるゝに連れて貧富の區別は漸次に成立し來つた。此等の階級的區劃は國家を形成せしむる條件とこそなりたれ、國家をもちて生ずるものでは無い。驕りて考へる。一派の學者の如く國家と階級との起源を等しく征服關係に求むるにしても、征服によりて先づ確立せらるゝものは階級の關係にして國家に非ず、國家は此階級關係を支持する機關として形成せらるゝものと見なければならぬ。今議論の順序上、此點は深く立入る事を避ける。兎に角に、私共は階級は國家に先だちて存立し、或る意味に於ては『階級争闘を抑壓する爲め機關』として、又は少數の多數に對する支配絞取の關係を支持する手段として、又は經濟的手段を避けたる階級の爲にする『政治的手段の組織』として、形成せらるゝ事を認めなければならぬ。これ明に、階級が國家以外にその獨自の成立の根據、變動決定の原因を有する證據である。云はゞ階級の中明に國家外的要素の存在が認められる。

或は次の様に云ふものがあらう。階級の存立が國家に先だつ事は勿論である。然るに拘はらず自分等が階級を國家的範疇なりと考ふるのは次の事情による。國家の形成は階級の存在を其豫件とするとしても、國家は階級的支配の機關として成立する。一方國家は階級を離れて理解し得べからざると同じく、他方階級は國家一たび成立したる以上、國家を離れたる存在を有するもので

は無い。國家組織の支柱として、國家と表裏の關係に立ち、國家の變動にして階級の變動を意味せざるものなく、階級關係の變動にして國家組織の變動を伴はざるは無い。云はゞ國家が階級的範疇なるが如く、階級は國家的範疇である。勿論此立場は階級を以て國家的範疇なりと見るのに、それが國家の一部分にして、其一切の變動皆國家によりて決定せらるると云ふ意味に於てするのでは無い。然れども二者を相表裏し相離れず、相互の變動相平行すと云ふ意味に於てこれを敢てする。私は今かゝる立場を是認し得ない。姑く其見解に従ひて、國家を一に階級的支配の機關と見、此階級的關係の變動は當然に其綫取乃至抑壓の機關たり表現たる國家組織の變動を伴ふものと見る。然れども此階級的關係の變動は抑も何によりて來るか、それは重に國家以外の事情から來らなければならぬ、此事は一派の論者(經濟史觀をとる社會主義學者並びにグムプロヴィツチの如き社會學的國家觀の支持者)の明に認むる所である。此國家以外の事情によりて變動したる階級的關係は直に其表現を國家組織に有するものでは無い、二者の相平行せず、此表現の十分ならざる所に争鬪があり革命が行はれる。従ひて階級的關係は國家の組織と表裏せむとする大體の傾向をこそ有すれ、完全に相表裏するものに非ず、國家の組織とは獨立なる階級の變動、形態が常に存在し得る。云はゞ階級に於ては必然に國家外的要素が存在する。此事は説いて明瞭ならざる點もあるが、餘論的事柄丈に別に立ち入らぬ。

時間的發達の考察より轉じて、云はゞ靜學的なる分析に入る。階級の區劃に關して國家の意志乃至組織が重要な意義を有する事は前述の如く疑ひ難しとするも、國家を離れて此區劃の存在する事は看過し得ざる點である。第一、若し階級にして國家的範疇ならば國家の存せざる所に階級的區劃の存在し得る理由は無い。然れども事實は之を否定する。例へば茲に一大汽船の乗客を想像せよ、又はあらゆる階級の人々の來り集まるモナコを想像せよ。そこに見出さるゝ人々の集團は一の國家の權力によりて統一を保てるものでは無く、寧ろ共同の目的、又は地域的接近によりて一集團をなす。彼等は本來各相異なる多數の國家に分屬する。然るに關らず、彼等相互の關係は一律平等なるものに非ずして、其間力の差異あり、相互の尊重、服従、賤視の事實が認められる。船上の英國の貴族と支那人の苦力とが互に上下の懸隔を意識せずとは何人が之を信じよう。船客の集團を形づくれる個々の人々は何れかの國家に屬するにしても、集團そのものは何れの國家にも屬せず(法律上の技巧の問題は別として)して而も、其間に階級的區別が認められる。云はゞ國家の存せざる所に階級の別が存する。第二、若し階級が國家的範疇ならば、國家の組織乃至國家の意志に於て認められざる限り階級的區別は存在せざる譯である。然るに事實に於ては此國家の組織又は其意志を超えて階級の區劃が存在する。例へば今日の文明國家の組織に於ては人々はすべて少なくとも表面上平等の地位を有し、從ひて貧富による階級的區劃は國家の組織の一部

をなすに非ず、又直接には國家の意志の内容をなすものでも無い。然るに拘らず、此區別は國家の意志の前に於ける所謂四民の平等の認めらるゝほど著しくなつて行く。或は論ずるものがあらう、貧富の懸隔は私有財産制度の必然なる結果であり、而して此制度は國家によりて維持せられる、従ひて、此階級的區劃は國家の意志を離れて存しないでは無いかと。私と雖も勿論かゝる階級的關係が財産私有と云ふ國家的制度を離れて存立せざるのを認める。然れども、直接なる内容として、國家の組織又は意志が貧富の懸隔を有するのでは無い。甲が富者たり、乙が貧者たる事は國家の組織又は意志の外に於て營まるゝ人々相互の作用の結果にして、國家をものゝ内容に屬する事とは思はれぬ。若し此點を承服せざる人あらば更に進みて他の例を擧げる。北海道に於ける大和民族とアイヌとの間に於て、而して恐らくは(私は確實に斷言し得ないが)北米に於ける白人と黒人との間に於て、國家の認むる何等の地位的懸隔も存在しない。然るに拘はらず、其間に顯著なる階級の區別があり、而もそれは貧富の懸隔の如く、間接的にも國家の意志の結果であるとは思はれぬ、云はゞ國家の組織又は其意志を超えて階級の區劃が存在する。

此の如く時間的發達の考察より見ても、又靜學的なる分析から見ても、階級の區劃の中には常に國家の意志に依存せざる、云はゞ國家外的要素の存在するを見る。従ひて階級は到底國家的範疇として考へられ得ざるものである。而して、此階級と國家との關係に就いて述べたる所は、階

級と國家以外のあらゆる部分社會との關係に就いても當てはまる。然りとすれば、階級は如何なる部分社會の範疇としても考へ得べきものに非ず、たゞ全體社會の範疇としてのみ認めらるべきものである。勿論國家は一切の部分社會の中に最も重要な地位を占むるが如く、階級に對しても著しき決定的作用を及ぼす、然らば此作用の内容如何、又階級の全構造に於て此内容が如何なる意義を有し得るや、國家と階級との交渉を明にせむとする限り、これは當面の重要な問題である。これに答解を與へむが爲に、私は轉じて階級を決定する力の種類及び其相互の關係を考へる。

三

階級が何であるかの答へ難き事は前述の通りである。然れども、此答解が如何様に與へらるべきよ、此階級が力の差等を中心要素とする事は争ひ難い。從ひて階級の種々なる區劃は此方の内容によりて決定せらるゝと見なければならぬ。而も私の狭き見聞の範圍から云へば、此階級を決定する力に關して組織的考察が殆ど行はれて居ない。此種の試みの唯一のものとして私はゼム・ミルの力の三分類を知るのみ、ワイイザアが權力の考察に於て內的權力外的權力の二者を分ちたる事もこれと關聯する所深いけれども、力のすべてに亘る見方とは思はれぬ。タルドの『權力

の變形』に關する研究に獨創的のものあるにせよ、それは權力の泉源の分析のみに關してすら精確なりと見難く、力の包括的考察としては猶更に許し難い。

私は先づ出發點に於て社會的勢力の概念を明にする。之を説明する前には人人の力の意義を説かなければならぬ。此私共の力と云ふは自己の要求を充足せしむる能力である。かくて一切の能力即ち可能は力である。然れどもすべての力がやがて社會的勢力であるとは云へない(此言葉には soziale Macht, social power などの語が用ひられ得ると思ふけれど、それが一般的に用ひられるとは云ひ難い)。單なる力と社會的勢力とを區別すべき點は二ある。後者は前者が單純に何等かの要求を充たし得る能力なると異なりて、社會的關係に於ける能力、即ち他人の意志を左右し得る能力である。千載の生命を有する藝術上の作品を創造し得る藝術家の能力、心の赴く所に従ひて自ら則を超えざる聖人の道德的性質、これらはそれ自體に於て一の力なれども社會的勢力では無い。富の力、政治上の權力と云ふが如きは、單に要求を充たしうる能力なるのみならず、他人の意志を左右し得る意味に於て、力なると共に社會的勢力である。社會的勢力は此の如く一方に於て、社會的關係に於ける力なるのみならず、移動性を有する、換言すれば成員の一方より他方に移し得べく、又一方に乏しからしめて他方に集積せしめ得られる。個人の文化的能力は之を奪ひて他人に與ふる事を得ざれども、特權、身分、財産の如きは一人より取去りて他人に加ふる事

極めて自由である。社會が意のままに分配し、其各人の享有する分量を如何様とも變更せしむる事が出来る。此方と社會的勢力とは密接なる關係を有し其間複雑なる因果の作用がある。然れども此二者は明確に區別せらるゝ事を要する。

社會的勢力が階級の區別、對立を決定するのに重要な役目を演ずる事は何人も争はざる所である。然るに近頃、階級を論ずる多くの學者は富、財産、所得と云ふが如き經濟的因子に特殊の重みを置く。階級の區別を絞取者と被絞取者との別に存すとなし、又は所得の泉源の差異にありと見、又は財産の有無によりて、從ひて有産者と無産者とに分たれると考へ、又は經濟的利害の對立に根據を置くに信するが如き、社會主義的色彩を帯びたる階級觀はすべて皆然り。勿論近代の社會組織にありては此經濟的因子が殆ど唯一なる階級的區劃の決定者なるかに見える。然れども少しく時代を溯りて、出生による特權即ち身分の制度が重要な意義を有したる社會組織にありては、富、所得の如き經濟的なる事柄が階級別決定の副次的因子たるに止まる。更に進みて、古代印度の如き社會にありては貧困其事が最上位の階級の特徴をなし、條件をなして居る。かくて私共は經濟的因子、即ち財産所得を併せ意味せしめたる最廣義の富以外に、なほ他の階級別決定の要素を認めなければならぬ。かゝる要素は云ふまでも無く社會的勢力であるが、ゼムス・ミルは此勢力について三種のものを區分した。其一は權力にして、其二は富力、其三は威力(dignity

と云ふ語を姑く此の如くに譯する)である。エエレンフェルスは價値を論ずるに當り強制に説き及び、強制を行ひ得る力として武力と富力とを擧げた。富の力に對立せしめて武力又は權力を數ふる學者の數は此外なほ少しとせぬ、時としては更に才能、門閥(出生)等を數へ加ふるものもある。私はゼエムス・ミルの見解に重きを置き、これを考察の出發點としたい。

四

ゼエムス・ミルは權力、富力、威力の三者を對立せしめたれども、此三者の關係を説き盡したりとなし難い。私はこれらの聯絡を見る爲に先づ社會的勢力を二種に分つ、其一是能動的なるものにして其二是受動的なるものである。

前述の如く社會的勢力は他人を自己の意志によりて左右する能力である、換言すれば、服従せらるゝ可能である。然るに此服従は服従せらるゝもの、要求なくして自らに行はるゝ事あり、服従せらるゝもの自ら之を要求して捕へ來る事がある、前者の場合、服従は被服従者の側より見て受動的にして、後者の場合、それは能動的である。畢竟此區別は一人の意志の被服従者の意志に副ふ事が後者の要求内容をなせるや否やに存する。一方は見出さるゝ所の服従にして他方は捕へらるゝ所の服従である。服従の反面が常に社會的勢力である所から、これは前述の二者に別たれ

る。而して服従を見出す可能は受動的なる社會的勢力にして、之を捕ふる可能は能動的なる社會的勢力である。(註一)

(註一) 私ばわざき社會力と云ふ言葉を選びける。社會力の言葉は Social forces 即ち社會的現象、社會の諸活動の動因として考へらる欲望、要求を表はす爲に用ひられる。時としては、社會が個人の上に精神的なる威壓又は拘束を加ふる其方の意味に用ひられる、即ち慣習、道德、輿論の如き所謂社會意識又は社會の生命 *life of the community* の個人に及ぼす力の謂である。茲に云ふ所の社會的勢力はこれらと全然其意義を異にするが故に、之を表現するに社會力の言葉を用ひず、後者を北米の社會學者(たとへばチオド、ロウズ、エルウツドなどの如き)の所謂 social forces の意味に保留し置く。

受動的たる社會的勢力を表はすに威力の言葉を用ふる。これはゼエムス・ミルの所謂 *dominance* に當る。數多の社會心理學、集合心理學の著者の所謂威光 *prestige*、また例へばジンメルの云ふ權威 *Authority* など、皆此威力の中に含まれる。此自發的なる服従は之を服従者の意識に立入りて見る時それは一種の尊重、又は進みて歎賞である。然るに此尊重は被服従者の有する社會的地位、權力、富と云ふが如き外部よりして此人に加へられたる力、又は其人の修得練習したる知識藝能の故に生じ來る事もあり、然らずして、其人の有する外的なる力或は其文化的能力の故に非ず、其人格の核心に對して捧げらるゝ事もある。此等の區別に従ひて社會心理學者の間には威光と權威との別け方が(時としては人により正反對なる威光の解釋が)行はれる、けれども私共の今取扱ふ問題よりしては何等かゝる區分に顧慮する必要は無い。要求する事無かりし服従を見出す可能をすべて威力の語を以て意味せしめる。多くの學者によりて才能又に更に廣く見て、文

化能力(文化内容を創造し、傳播し、享有する能力)が、權力や富と共に一の社會的勢力として考へられる、私も嘗てはかゝる見解を抱きたる事あれども、立入りて思ふに、才能を自ら體は何等社會的勢力に非ず、たゞ人間以外の精神的對象に關する要求を充足せしむる可能即ち單なる力を意味するのみ、たゞ此才能が威力を伴ふ事は争ひ離い、此意味に於てこれは威力を伴ふ資格にして、云はゞ社會的勢力に到達すべき通路である。然れども、才能は決してかゝる通路の唯一なるものに非ず、出生即ち門閥と云ふ事が明にまた威力を伴ひ易い。此等を外にしても權力、富等が此種の威力を生ずる事は明白なる事實にして、進みては、かゝる權力、富、又は出生等の標徴たる一定の習慣様式、風俗、言葉使ひ、服裝、趣味などさへまた力の表章として之を有てるものに或る程度の威力を與へる。要するに、單なる力なると又は社會的勢力なるとを問はず、優勢なる力の所在は一種の威力を伴ふ。而して此威力の中心、又は支持者となるものは第一義的には個人そのものたるべき道理であるが、轉じては、個人の集團ごとにある階級、職業團體等である事があり、又は大都市の如き一地方である事もある。此の如く威力への通路即ち威力を伴ふ資格には數多のものがあるけれども、其中最も重なるものは文化能力即ち才能である、これは他の階級的區別から全く獨立に威力を生ずる傾向を有つ。これに次いで重要なるは出生である、而して私は富、權力の如きものを以て威力への通路としてはさまで重要ならずと見る、蓋し、此等のもの

の威力を生ずる事最も明白なるに拘はらず、此威力が伴ひ來るも社會の階級的區劃の上に何等著しき變化を及ぼさざるからである、此點は後に説明を加へたいと思ふ。出生に伴ふ威力は上下の階級的區別が社會に存在する事を條件としてのみ、云はゞその派生的事實として生じ來るに拘はらず、階級の組織の上に一種の決定的勢力を有す。才能に伴ふ威力に至りては、第一、かゝる文化能力が一の優秀なる力であると云ふ點から、この方に對する尊重として生ずるのを一般とし、第二、文化能力を有するものを或る場合、超人的なる精神的原理例へば神、善そのものゝ代表者と考ふることにより、此原理に對する尊重、服従の推轉によりて生ずる。而も此種の威力は前述の如く他の一切の階級的區劃を獨立なる現象なるが故に、階級の形成を考察するに於ては最も重要なものである。

次に能動的なる社會的勢力の考察に轉ずる。それは前述の如く、服従を捕ふる力である。此種の力としては普通に權力と富とが擧げられる。然れども、此所謂權力の内容如何、又、權力と富とが如係なる關係に立つかの點は殆ど説明を加へられてゐない（少くも階級に關する社會學的考察にありて）。コモルチンスキは其資本概念の考察に於て資本を一の權力關係と見た。オツペンマア、グムプロキッチ一派の立場は武力的財産 (Gewaltigentum) の概念を確立した。マルクス、エングルスの唯物史觀が權力が常に富力の支持者によりて掌握せらるゝと説きたるは周知の事柄であ

る。此等の見方は常に私共ならば權力と富との根本的關係如何、また權力の内容如何の考察を迫る。

富の力、又は財産の勢力に關しては一の誤れる考が廣く行はれて居る。金權の跋扈を見て、今日の時代は物質が人を支配する時代であると云ひ、物質の勢力が一切の力を壓迫する時代であると云ふ。然れども、物質そのものは何等の社會的勢力をも有しない、それは死物である。物の人を支配すと云ふ事は考へ得べからざる事、勿論一の比喩的表現たり得るのみ。試みに地上一切の權力を取拂ふと假定せよ、物の人に對する支配も亡びよう、而して財産又は富そのものすらも残らぬ。畢竟富は權力を基礎とする、進みて云へば、權力の特殊なる場合、又は特殊なる表現である。權力なき所、人は死したる物質と相對するのみ、二者の間に何等社會の公認し保障する關係は無い、此關係なき所富と財産との存立し得る餘地は無い。茲に於て私は權力と富との終局の聯絡を見なければならぬと思ふ。先づ考へる、權力とは何であるか。茲には政治學乃至法律學に於て權力の意義を如何様に約束して居るとも、これに拘はる事無く、自分の理論構成の目的の爲にこれを最も廣義に解釋する。能動的なる社會的勢力は即ち權力である。換言すれば服従を捕へ得る可能である。謂ふにすべての社會は其中に成員の服従意志を含む、成員が何等かの中心——社會そのもの又は地位高きもの又は其社會の表章等——に對する服従意志なくしては、社會も存續し得ない。專制國家と雖も又は征服國家と雖も、決して武力によりて立つものに非ず、成員の同意を以て基礎となすと云ふグリーン一流の考は事實の真相を見たるものであると信ずる。此成員

の服従意志が或る中心點に集中しそれが此點に於て把握せられて作用する、此作用は即ち服従を捕ふる事、即服従せざるものあらば之を壓迫して服従せしむる事である。此集中せられたる服従意志が作用する姿、これが即ち權力に外ならぬ。茲に一の凹面反射鏡を想像せよ、其前方に數多の發光體あり、これらから出づる光線が此鏡面に反射すると共に集中せられ、而して更に他の物體をも燃燒し發光せしむる仕掛となる。鏡面に集まる光線は云はゞ成員の服従意志にして集中せられたる光線の燃燒作用が權力の作用に當る、而して此作用を營むものが權力に外ならぬ。成員の服従意志そのものは權力に非ず、之を集中せしめ、且つ之に一定の方向を或る意志によりて與へ、(鏡面の曲率がこれに當る)、作用せしむる所に權力が存立する、一言にして云はゞ、權力とは作用せしめらるゝ服従意志である。それが一種の力として、所謂服従を捕へ得る可能を有するは、これを形成する所の服従意志、即ち既に服従せる意志が其武力、其才能其他一切の力を擧げて之に捧ぐるが故である、社會の方は飽まで個人の力の上にあり、個人は集團に對してたゞ永久的依存の狀態に立つ外無きが故である。かくて權力は決して武力と同視せらるゝ事を許さず、權力の作用が武力となりて現はるゝ事はある、然れども、武力は此作用の數多ある中のたゞ一つ、決して權力そのものと混同せらるゝ事を許さぬ。又法律學者の中には、權力の本質を以て或種の意志の力であると見るものが多い、此或種のと云ふ制限乃至説明には今立入る必要を見ないが、意志の力とは果して何物であるか。意志そのものには何等他人を拘束し得べき力は無い、或人の意志を支持する力は權力たり得る事はあらう、意志の力が權力である事は考へられぬと信する。